

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02486

研究課題名（和文）教育実践記述のウィトゲンシュタイン的想像力：教育の複ゲーム状況の人類学に向けて

研究課題名（英文）Wittgensteinian Imagination of Educational Practice Description: Towards Anthropology of Educational Multi-layered-game Situations

研究代表者

平田 仁胤（Hirata, Yoshitsugu）

岡山大学・教育学域・准教授

研究者番号：50582227

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教育実践を複ゲーム状況という観点から描き出すことによって、一枚岩として描き出されがちであった学校/教室の言語ゲームの多重性・多層性を明らかにした。その多重性・多層性は、子どもの学習に資するために敢えて教師や大人によって生み出されており、そこでの動揺や攪乱を経て、新たな単ゲームへと導く役割を担っている。だが、単ゲームへと収束する過程には、政治権力作用が働いているため、学習者の他者性を顧慮することへの倫理もまた、教育に求められることが再確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内外において、ウィトゲンシュタイン哲学に基づくフィールド調査はほとんどなく、また、ウィトゲンシュタインと教育を検討してきた日本の先行研究のほとんどが、教育学における教育観・教育理論の批判的検討を中心として行ってきたなか、本研究は、ウィトゲンシュタイン哲学における人類学的な視点に着目し、その成果として教育実践の複ゲーム状況を解明したことにその意義がある。

研究成果の概要（英文）：By depicting educational practices in terms of a multi-game situation, this study reveals the multiplicity and multi-layered nature of language games in schools/classrooms, which have tended to be depicted as monolithic. The multiplicity and multi-layered nature of the language games are created by teachers and adults who dare to contribute to children's learning, and they serve to lead children to a new single game through the turmoil and disturbance in the game. However, since the process of convergence into a single game also involves political power effects, it was reaffirmed that ethics of respect for the otherness of learners is also required in education.

研究分野：教育哲学

キーワード：ウィトゲンシュタイン 複ゲーム状況 エスノグラフィ 言語ゲーム 人類学

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した直接的な背景には、教育思想史学会第28回大会のシンポジウム「教育学としてのウイトゲンシュタイン研究」において共有された課題意識がある。従来のウイトゲンシュタイン研究は文献研究を中心となされており、特定の教育観・教育理論の批判的検討を行ってきたが、教育に関する理論を豊饒化したり、新たな視点を提供したりするといった貢献をあまりなしてこなかった。ウイトゲンシュタインの言語ゲーム概念が幾度となく参照されつつも、教育実践を記述するほどには精緻化されてこなかった。

しかし、後期ウイトゲンシュタインの言語ゲーム論は、特定の教育的関係を前提にして実践を考察したり、特定の教育思想・理論として援用したりすることよりも、人類学的な視点から教育実践を記述している点に特徴がある。したがって、その人類学的な特徴を踏まえ、従来の研究がなしえなかった教育実践の記述を行い、教育(学)への貢献を目指そうと考え、本研究は開始された。

2. 研究の目的

本研究は、後期ウイトゲンシュタイン哲学を人類学の視点から読み解くことによって得られた視座から、学校教育(教科教育、道徳教育)、幼児教育、特別支援教育、障害者福祉施設といった様々なフィールド調査を実施し、矛盾を含みながらも多重的・多層的に展開される教育的コミュニケーションの内実を明らかにすることを目的とした。とりわけ、人類学者である杉島が提唱している複ゲーム状況概念に依拠することによって、フィールド調査から得られたデータを分析し、教師あるいは大人が学習者あるいは子どもをどのようにして言語ゲームに参入させようとしているのかを詳述しようとするものである。

3. 研究の方法

後期ウイトゲンシュタイン哲学に示唆を得た人類学の研究蓄積を検討し、有益な視座を獲得したうえでフィールド調査に臨むことにした。具体的には、Giovanni da Col and Stephan Palmié (eds.) (2018) *The Mythology in Our Language: Remarks on Frazer's Golden Bough*, HAU Books および杉島敬志 (2014) 『複ゲーム状況の人類学: 東南アジアにおける構想と実践』風響社の検討を行った。

その結果、以下の視座に基づいて調査を開始することにした。すなわち、(1)教育実践の場を、単一のルールが統制する言語ゲームとしてではなく複ゲーム状況として捉えること、(2)談話を通じて言語ゲームが立ち現れる過程に着目すること、(3)教育実践に固有の言語ゲームが存在する可能性を考慮すること、である。

なお、コロナウイルス感染症拡大の影響により、調査を断念せざるを得なかったフィールドが複数ある。渡邊福太郎が担当する予定であった幼児教育のフィールド調査は、国語教育にかんする文献研究へと変更された。杉田浩崇が担当する予定であった障害者福祉施設のフィールド調査は断念され、当該福祉施設が発行する映像資料や文献の研究となった。鶴田真紀が担当する予定であった特別支援学校のフィールド調査は、過去のフィールド調査データの再解釈に変更された。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究は、それぞれのフィールド調査から得られたデータを、上述の視座に基づきながら共同で分析を加えた。国内外の教育学におけるウイトゲンシュタイン研究および人類学の先行研究との関連性について、丸山恭司による指導および助言を得ながら分析を進めた。その結果、以下の知見を得ることに成功した。

学校教育(教科教育、道徳教育)

平田仁胤が行った理科の授業のフィールド調査から、理科教育において2つのルールが教室内を統制しており、両者が矛盾しながらも、その矛盾が問題とならないような教室空間が展開されていることを明らかにした。科学的態度を尊重せよというルールと、科学的態度を尊重しすぎではないというルールが矛盾しながら、いずれも必要不可欠な役割を果たしている。理科の授業は、児童に科学的態度を学習させることを目的としており、このルールへの違反は自己矛盾となる。反対に、科学的態度を尊重しすぎるならば、学校における科学的実験を実施することの限界性が顕わになるため、そうならないよう暗黙裡に児童を統制することも求められる。この矛盾を調停するものとして教師の信用/権威が教室の言語ゲームの基底に存在していることを明らかにした。

山岸賢一郎が行った教師へのインタビュー調査は、子どもに「考え、議論する」ことを求める道徳教育がなぜ可能なのかを明らかにした。認知科学の知見によれば、人間は反省的に思考することが苦手であるにもかかわらず、道徳の授業は「考え、議論する」ことを実現している。これは、子どもにとって自明の言語ゲームを教師が動揺させることによって、楽しみながら議論へと導くことによって可能となっていた。具体的には、1)「考え、議論する道徳」を「好き」「面白

い」と捉える教師の姿勢、2)教師自身を授業の参加者の一人として見なす態度、3)ゲームの参加者が「分かっているつもり」になっていることや「当たり前」と思っていることの問い直し、4)児童の意見の共通点の確認と相違点の承認、5)他の意見との共通点と相違点を見出しつつ「極端な意見」を歓迎する構え、6)様々な教具の活用、である。一見すると単一の言語ゲームが、実際は複ゲーム状況であることを教師自身の働きかけによって可視化させ、その動揺を経験させることで、子どもに道徳について議論させていたのである。

渡邊福太郎は武田常夫の授業記録を分析することによって、文学の授業における複ゲーム状況の特質を解明した。小学校6年生を対象とした俳句と短歌を題材とする授業において、武田常夫が子どもたちの俳句・短歌解釈を集約するさい、斎藤喜博による介入がなされることによって、創造的な解釈が誕生した。それは「作品の内面」に迫り、「作家や作品との豊かな連帯感」を生み出す授業であった。権威者である教師は、教室内をカプセル化するのみならず、敢えて子どもたちを攪乱させることで、生成としての学びが実現するような自由な不定見者の立場を取ろうとしていたのである。教師が絶え間ない自己否定を続けることで、教室の言語ゲームを不安定化させるという特殊な教室の言語ゲームのあり様を明らかにした。

特別支援教育

鶴田真紀は、養護学校に在籍する生徒Aの位置づけをめぐる複ゲーム状況を考察した。調査者から生徒Aは「健常」に思われるが、養護学校の教師からは「ボーダー」として捉えられ、分かりにくい障害のある生徒として位置づけられていた。調査者にとって生徒Aは、ランニングの時間に他の生徒に「がんばって」と声かけをするほど大人びた人物に映っていたが、教師からは熱狂的などある歌手のファンであり、その行動が常識の範疇に収まっていないとその異質性が指摘されていた。生徒Aに関する様々なエピソードが教師から語られることで、障害を持つ生徒としての位置づけが強化されていっており、複ゲーム状況が単ゲームのそれへと収斂する過程を明らかにした。

障害者福祉施設

杉田浩崇は、びわこ学園のアイデンティティが医療・看護から教育・保育へと添加する契機となった『夜明け前の子どもたち』という映画作品を分析した。不定見者である撮影班の人々が児童に積極的に介入することによって、学園施設の人々の実践を攪乱するという複ゲーム状況の対立を顕在化させており、そこから新しい学園のアイデンティティが構築されていく過程を明らかにした。その際、重要な役割を果たしたと思われるのが、職員や解説を務めた研究者の用いた、「心の杖」「心の発動機」「自我の窓」などの内面に関するメタファーである。これらのメタファーが有意味に機能することで、重症心身障害児は権利主体と見なされ、その発達保障を目指すものとして療育実践が規定された。同時に、内面表出の微妙な陰影をめぐって、職員と重症心身障害児の間で行為記述の多様性が生まれ、コミュニケーションが継続・豊饒化していった。

以上の研究成果を総括するならば、教育実践を複ゲーム状況という観点から描き出すことによって、一枚岩として描き出されがちであった学校/教室の言語ゲームの多重性・多層性を明らかにしたと言えるであろう。その多重性・多層性は、子どもの学習に資するために敢えて教師や大人によって生み出されており、そこでの動揺や攪乱を経て、新たな単ゲームへと導く役割を担っている。だが、単ゲームへと収斂する過程には、政治権力作用が働いているため、学習者の他者性を顧慮することへの倫理もまた、教育に求められることが再確認された。

(2)国内外における位置づけおよびインパクト

本研究の位置づけは以下の通りである。まず日本国内についてだが、ウィトゲンシュタインと教育を検討してきた先行研究のほとんどが、教育学における教育観・教育理論の批判的検討を行ってきた。しかし、本研究はウィトゲンシュタイン哲学における人類学的な視点に着目し、上述のようにフィールド調査を実施した。ウィトゲンシュタイン哲学に基づくフィールド調査それ自体が先進的かつ画期的であり、その成果として教育実践の複ゲーム状況を解明したことに意義があると考えられる。

国外において、ウィトゲンシュタインと教育をめぐる先行研究は、ウィトゲンシュタイン哲学における諸概念を用いながら、学習/教育の特質を描き出してきた。しかし、フィールド調査を行った研究はほぼなく、やはりそこに本研究の重要性があると考えられる。

国内外双方について言えることだが、ウィトゲンシュタイン哲学の教育実践記述の可能性を拡大することに成功した研究であろう。引き続き、国内外に研究成果を発表することによって、教育学におけるウィトゲンシュタイン研究の新境地が切り開かれると考えられ、そのインパクトは大きいと思われる。

(3)今後の展望

とはいえ、本研究には多くの課題が残されている。フィールド調査の研究手法に課題があり、分析に値するデータを十二分に収集できたとはいえない部分がある。また、ウィトゲンシュタイン哲学は社会学のウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーに強い影響を及ぼしているが、その領域における先行研究の検討は不十分なままであった。他にも、本研究の成果を国外へと発信することができなかったため、そのことも課題として残されている。

したがって、今後の展望として、次のことが考えられる。まず、本研究の成果を国内外へとさらに発信することである。研究成果の発信に対するフィードバックを踏まえながら、フィールド

調査の精度を高め、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの知見を再検討することが求められるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 山岸賢一郎 | 4. 巻 49 |
| 2. 論文標題 「考え、議論する道徳」によって「答えが一つではない道徳的な課題」に上手く向き合えるようになるのか - 二重過程理論に基づくジョシュア・グリーンの道徳哲学を検討しながら - | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 九州教育学会研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 57-64 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 渡邊福太郎 | 4. 巻 第29号 |
| 2. 論文標題 イギリス教育哲学研究の動向 ブランダムからウィトゲンシュタインへ | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 三田教育学研究 | 6. 最初と最後の頁 pp. 13-20 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 杉田浩崇 | 4. 巻 49(16) |
| 2. 論文標題 ウィトゲンシュタインと子ども 言語ゲームの習得 / 刷新モデルを超えて、その機微へ | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 現代思想 | 6. 最初と最後の頁 251-258 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 山岸賢一郎 | 4. 巻 19号 |
| 2. 論文標題 教育哲学研究は「礼儀」の道徳授業にどう貢献できるか ゴッフマンの「儀礼的無関心」に関する議論を援用しながら | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 教育基礎学研究 | 6. 最初と最後の頁 35-51 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 鶴田真紀 | 4. 巻 108 |
| 2. 論文標題 「自閉症児の親」の構成：療育の准専門家になることをめぐって | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 教育社会学研究 | 6. 最初と最後の頁 227-247 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 鶴田真紀 | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 小児病院のきょうだい預かりにおける支援者役割：保育者ではなく支援者へ | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集 | 6. 最初と最後の頁 95-108 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 杉田浩崇 | 4. 巻 60 (12) |
| 2. 論文標題 やさしく学べる道徳教育×哲学、「ねばならない」の誘惑に抗う ウィトゲンシュタインの哲学から考える道徳への臨み方 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 道徳教育 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 Hirotaka Sugita | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Re-envisioning personhood from the perspective of Japanese philosophy: Watsuji Tetsuro's Aidagara-based ethics | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Educational Philosophy and Theory | 6. 最初と最後の頁 1-12 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00131857.2021.1897571 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 渡邊福太郎 | 4. 巻 122 |
| 2. 論文標題 【書評】Naoko Saito, American Philosophy in translation | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 教育哲学研究 | 6. 最初と最後の頁 91-96 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 鶴田真紀 | 4. 巻 49 |
| 2. 論文標題 病院内教育の理念と経験としての実践 - 教師の語りに着目して - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 神奈川大学心理・教育研究論集 | 6. 最初と最後の頁 131-144 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 丸山恭司、平田仁胤、杉田浩崇、山岸賢一郎 |
| 2. 発表標題 ウィトゲンシュタイン哲学に基づいた教育実践記述・分析の可能性 |
| 3. 学会等名 教育哲学会第65回大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 平田仁胤 |
| 2. 発表標題 理科教育における談話分析：ウィトゲンシュタイン『確実性の問題』を手がかりとして |
| 3. 学会等名 日本教育学会第81回大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 丸山恭司、杉田浩崇、鶴田真紀、山岸賢一郎、渡邊福太郎、平田仁胤 |
| 2. 発表標題 ワイトゲンシュタイン哲学に基づく教育実践記述の可能性 |
| 3. 学会等名 応用哲学会第14回年次研究大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山岸賢一郎 |
| 2. 発表標題 「考え、議論する道徳」という困難をめぐる一考察 小学校教師の語りから示唆を得て |
| 3. 学会等名 九州教育学会第74回大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山岸賢一郎 |
| 2. 発表標題 「考え、議論する道徳」によって「答えが一つではない道徳的な課題」に上手く向き合えるようになるのか 二重過程理論に基づくジョシュア・グリーンの道徳哲学を検討しながら |
| 3. 学会等名 九州教育学会第73回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Maruyama, Yasushi |
| 2. 発表標題 Pedagogical Tractatus, Pedagogical Wittgenstein |
| 3. 学会等名 Forum for Philosophy (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 杉田浩崇 |
| 2. 発表標題 生政治における重度障害児の代理表象をめぐる一考察 三人称あるいは非人称の哲学を手がかりに |
| 3. 学会等名 教育哲学会第63回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 渡邊福太郎 |
| 2. 発表標題 ロンドン大学への留学を終えて |
| 3. 学会等名 三田教育学会講演会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 平田仁胤 |
| 2. 発表標題 言語ゲームの変容と人間形成論 |
| 3. 学会等名 教育哲学会第63回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 鶴田真紀 |
| 2. 発表標題 「自閉症の子ども」をめぐる療育記録の分析 |
| 3. 学会等名 日本教育社会学会第72回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 田中マリア・杉田浩崇 編 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 協同出版 | 5. 総ページ数 247 |
| 3. 書名 新・教職課程演習第7巻 道德教育 | |

| | |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 尾上雅信・三時眞貴子 編 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 協同出版 | 5. 総ページ数 229 |
| 3. 書名 新・教職課程演習第2巻 教育史 | |

| | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 平井悠介・曾余田浩史 編 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 協同出版 | 5. 総ページ数 258 |
| 3. 書名 新・教職課程演習第1巻 教育原理・教職原論 | |

| | |
|--------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 中坪史典・山下文一・松井剛太・伊藤嘉余子・立花直樹編 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 640 |
| 3. 書名 保育・幼児教育・子ども家庭福祉辞典 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 杉田 浩崇 (Sugita Hirotaka) (10633935) | 広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授 (15401) | |
| 研究分担者 | 山岸 賢一郎 (Yamagishi Kenichiro) (20632623) | 福岡大学・人文学部・准教授 (37111) | |
| 研究分担者 | 丸山 恭司 (Maruyama Yasushi) (30253040) | 広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授 (15401) | |
| 研究分担者 | 鶴田 真紀 (Tsuruta Maki) (60554269) | 創価大学・教育学部・准教授 (32690) | |
| 研究分担者 | 渡邊 福太郎 (Watanabe Fukutaro) (80634047) | 慶應義塾大学・文学部(三田)・准教授 (32612) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |